ミネソタ通信

Vol. 3　1994年11月20日　日本ミネソタ会発行

□　94年／95年度会長就任に当たり

日本ミネソタ会々長　梅　津　祐　良

94年／95年の２年間にわたり、日本ミネソタ会の会長に選任されました。前会長沖田哲也先生からバトンを受け、まことに若輩ではありますが、皆様のご支援を頂いて、今後２年間、会長をつとめさせて頂きます。幸い別欄で紹介しますように新役員として強力なメンバーに参加して頂きましたので大変心強く思っております。

私事にわたりますが、私は今年10月に縁あって、日本メドトロニックという会社に就職いたしました。メドトロニックという会社は本社をミネアポリスに置く、医療精密機器を製造、販売する多国籍企業です。私自身は84年以降ミネソタを訪れる機会がなかったのですが、メドトロニックに移ったことにより、早速ミネアポリスへの出張の機会に恵まれました。ダウンタウンはＩＤＳビルに加えて、いくつものスカイスクレーパーが林立し、あの有名なフォーシェー・タワーも高いビルに埋もれて見つけるのは困難になっています。ミネソタ大学のキャンパスも訪れました。コフマン・ユニオンは昔のままでしたが由緒ある古い建物はほとんどモダーンで背の高いビルに建てかえられていました。この10年間にミネソタ州と日本の関係も大分深まったのではないでしょうか。目下、ミネソタ大学出身のモンデール大使が日本におられます。さらにミネソタ・ベースの諸企業、ハネウエル、ジェネラル・ミルズ、カーギル、３Ｍ、その他多くの企業からアメリカ人が日本へ赴任してきています。さらに日本のインターナショナル・スクールの先生方は中西部、とりわけミネソタ州出身の方たちが多いようです。今後ミネソタ会もこれらの方たちに声をかけて、われわれの活動に参加を薦めたいと考えております。今後２年間皆様からのご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

□　役員紹介

1994年／95年度の新役員は次の方々です。

会　長：梅　津　祐　良
副会長：尾　形　朝　子
〃　：牧　田　真佐美（会計）
〃　：前　川　晃　子
〃　：遠　山　紘　司

□　1993年度日本ミネソタ会総会

1993年４月18日（日）、明治大学大学会館において、約40名の方々の参加を得て、93年度総会および懇親会が開催されました。総会では、新規会員と退会のメンバーが発表され、承認されました。会費納入滞納期間は３年までという提案が承認されました。法人会員の年会費10,000円と決定されました。さらに日本ミネソタ会規則第９条に基づき、現在顧問に選任されている中村正吉さんに加え、田島重雄さん、高藤昇さんが新しい顧問に就任することが承認されました。次いで会計報告が行われ、承認されました。

役員改選においては、94年度／95年度の会長として梅津祐良さんが推薦され、承認されました。

特別講演では、ミネソタ大学応用化学教授で、東京工業大学でリサーチに取り組むクリス・マコスコ教授から、ミネソタ州およびミネソタ大学の現状が紹介されました。続いて、ミネソタ州政府貿易局東京代表部駐日代表の山下宏さんから「ミネソタ・アップデイト」としてミネソタ州における最近の動向が紹介されました。

このあと懇親会に移り、各メンバーからの近況報告が行われ、さらにメンバー間の懇親が続き、盛会のうちに閉会しました。

□ GARIOA留学の思い出

中村正吉

敗戦後食べる物も着る物も乏しく日本がまだ占領下にあったころ－1951年7月、横浜港から米海軍軍用船で470余名のGARIOA留学生が渡米した。荒天の大圏航路を取り13日後にSan Franciscoに着いた。Golden Gate Bridgeを透して白亜の家々が建ち並ぶ丘を見た時の感激は忘れられない。これがアメリカか！これこそ天国だ！と思った。

米側のプログラムに従い、私はUniversity of Illinoiでオリエンテーションを受け、8月末にMinneapolisに着いた。University of Minnesotaに割り当てられたのは女性1人を含め7人だった。住所はばらばらで私はUniversity YMCAに落ち着いた。

週末には有志の米人や一世の人々からパーティーや食事に呼ばれることも珍しくなく、楽しく過ごすことができた。とくに、クリスマスにはDelinさんの家へ招待され、心暖まる一夜を過ごした。これが縁となり、同氏夫妻は日本人に好意を持ち、教会にも働きかけて、以後毎年のように日本から留学生を呼び寄せて世話をして下さった。先年夫妻が来日された際には、お世話になった十数名が集って歓迎し、また手分けして観光旅行のお手伝いをした。今日に至るまで40年以上もクリスマスカードの交換が続いている。

同じく友情が続いている人に、大学のForeign Student AdvisorだったDr.Moore夫妻がいる。St.Paulの同氏の家に1quarter下宿させてもらったが、熱心なクリスチャンで大変親切にしていただいた。女の子が2人おり、丁度私の娘達と同じ年頃だったが、ある日突然小学2年の姉が同級生の男の子を連れて来て、この子に日本語を教えてくれと言う。彼から1回5¢とって私に3¢払い、2¢の口銭を貯めて映画を見に行くと言うのには驚いた。Moore夫妻も何年か前に来日されたが、日本ミネソタ会のゲストとして歓迎会を開き、箱根へ同行したほか、京都の会員に連絡してアテンドしてもらった。

アメリカでの忘れ得ぬ想い出の一つに地方への親善旅行がある。留学生に地方の生活も体験させてあげようということでYMCAが計画し、Winonaという町の諸団体がスポンサーになったプロジェクトで、日本人3名を含み30ヶ国40名が招待された。Minneapolisの東南200キロのMississipi河畔にある人口25,000人ほどの町だが、週末の3日間、学校参観、工場視察、農場見学、ラジオ放送など盛り沢山のプログラムが用意されていた。私が泊まったのは教育委員長の家で、日本の事情を良く知っており話が弾んだ。奇麗な寝室でふかふかのダブルベッドを初めて体験して気分は最高だった。ところが翌朝、皆で教会へ行くので外へ出たら、彼が「君の外套はちょっと変だね。」と言う。私も前から少し変だとは思っていた。ボタンが左側に付いている。多分左利き用だと思っていた。然し、胸と裾がゆったりしていて腰がきついのは確かに変だ。彼が「ああそれは婦人用だよ」と叫んだ。えー？そんな馬鹿な！古着屋で買ったのだが紳士用の棚にあった。それに、派手好きの米国婦人がこんな灰色の外套を着るはずがない。そう思い込んだのが大間違いだった。さあ恥ずかしくて恥ずかしくて、然し寒いから脱ぐわけにもいかず、Minneapolisに帰る早々有り金をはたいて新品を買った次第。

一年の留学期間はあっという間に過ぎて帰国の時期が近付いたが、経験のために米国の工場で働いてみたかったので、当局に申請して2ヶ月だけ滞在延長が認められた。然しこの間の生活費は自分で稼がなくてはならないのであちこち当たってみたが、正直に2ヶ月だけ働きたいと言ったのでどこも雇ってくれない。Minneapolis Molineという農業用トラクターの製造会社に狙いをつけて粘った結果、渡米前に勤めていた連合軍総司令部からの感謝状が利いたらしく、Management traineeとして受け入れ、生活費$130（1ヶ月）を支給してくれた。設計、生産管理、機械工作、組立、総務等の部門で研修し、大変有益だった。米国企業の度量には感銘した。その会社も競争に敗れたのか、今は無い。